

内科学第一部門の教官人事について

前 川 暢 夫

私共の結核胸部疾患研究所に新しい教授候補者選考内規が作られたのは昭和45年7月3日であったが、その経緯については本誌前号に辻周介所長より詳細に紹介されている。

その後、助教授、講師および助手候補者選考内規が昭和45年10月1日に決定され、併せてしばらく不補充のまま経過して来た所内の教官人事がようやく軌道に乗るようになった。系としての選考方法や部門創設にあたっての選考について問題は残されているが、少なくとも数歩の前進ではあろうと考える。

内科学第一部門では助教授1、助手2の欠員があったが、私共はこれらの人事の選考を系としてではなく部門で行ないたいと希望し所長の招集した全教官の集まりで諒解されたので部門の教官の合議で以下の人事を全員の合意のもとに決定し、教授会に提出して審議を経て最終的な決定を見た。

助教授には助手の中西通泰氏の昇任が決められたので、その欠員補充とあわせて、内規の申し合わせに従がい新しいスタッフを簡単に紹介したい。

1) 中西通泰助教授

昭和29年京大医学部を卒業後直ちに胸部研内科1に入り、昭和40年7月に助手となり今回助教授に昇任された。誠実な人柄と着実な研究の進め方とについて部門内の信望は非常に厚い。主要な業績をあげると、「人体に投与された結核

化学療法剤の血中における消長の個体差とそれに及ぼす継続投与の影響」「切除肺病巣内結核菌の細菌学的研究」及び「気管支拡張症の遠隔予後」等で何れも苦勞を重ねて積上げられた成果で学界の注目を集めている。今後ますます精進される事を期待する。

2) 久世文幸助手

昭和34年京大医学部卒業昭和40年大学院医学研究科博士課程修了昭和41年7月より2年間米国シカゴ近郊の胸部疾患病院で臨床ならびに研究に従事した。従来は結核化学療法の基礎的ならびに臨床的研究を主としていたが、最近では非定型抗酸菌の薬剤感受性ならびに病原性に関する研究に取り組んでいる。まじめな、又熱心な研究者である。

3) 武田貞夫助手

昭和40年京大医学部卒業後、引続き内科1部門の臨床および研究に協力して来た。明朗快活な性格で胸部疾患の基礎ならびに臨床の広い範囲に興味をもち、熱心な努力家なので大に将来が期待される。

4) 賀戸重允助手

昭和43年京大医学部卒業、温厚な人柄に強固な意志と研究意欲を秘めている。先輩達とよく協調して現在は黙々と種々の資料からの吸収に没頭している。これからの新しい胸部疾患学の一方向を見出して行かれることを信じている。